

幼児の想像発達における 精神的なものと身体的なもの (II)

——身ぶり表現の哲学的・心理学的分析——

神 谷 栄 司

〔抄 録〕

小論は、デカルトとスピノザにおける心身問題の考察を通して、身体の能動性の意味、とくに心身一元論の視点からの意味を明らかにし、その視点からヴィゴツキーの発達理論の従来の解釈に変更を加えながら、「身ぶり表現」の哲学的・心理学的意味を解明している。ヴィゴツキー理論は①心理的道具による媒介理論、②発達・教育心理学理論、③心身一元論に立った「人間の心理学」理論の3つの方向性を持ち、その発達理論も「文化－歴史理論」というよりは「二重発達融合理論」と呼ぶべきものである。心理学の具体的問題はこのようなヴィゴツキー理論の観点からすれば、《言語と発達》と《身体と発達》の二重の関係から分析されるべきであり、幼児の想像発達も一方ではシンボリック・意味論的に、他方では身体的想像として捉えられる。この精神が直接に身体となる「身ぶり表現」は《言語と発達》の局面から抜け出して、想像を含む子どもの全体的発達に深くかかわるものである。

キーワード デカルト、スピノザ、心身一元論、ヴィゴツキー理論、身ぶり表現

現代心理学の危機の基礎にある……すべての主要な諸矛盾は、情念に関するデカルト学説のなかに横たわる諸矛盾である。

情念に関するスピノザ学説は現代心理学にとって実際に歴史的興味を提供しうるものであるが、これは、歴史的な過去を私たちの科学によって説明するという意味においてではなく、心理学の全歴史とその未来の発展の転換点という意味においてである。

——ヴィゴツキー『情動にかんする学説』

III 精神と身体の関係にかんするデカルトとスピノザ

前章では、幼児の身ぶり表現の哲学的・心理学的分析の一環として、イリエンコフの想像力

論をとりあげた。その特徴は、①想像力は論理的思考と並ぶ人間の「普遍的能力」であること、②したがって万人に備わる「普遍的能力」としての想像は最初は自然発生的に形成され、文化的・創造的想像へと発達すること、③想像の本質は、スタンプのような「想像」からも恣意的な想像からも区別される自由な想像であること、④そうした自由な想像の成立させる契機は、「あらゆる他者の眼」で見る類知的知覚、「部分よりも先に全体を見る」美的知覚、合目的性としての美などであること、⑤想像は弁証法的論理学と表裏の関係にあり、想像と思考は相互に補完しあいながら人間の知的発達をつくりだしていること、であった。もし、アダム・スミスの『道徳感情論』における想像力と感情の関係を摂取して、イリエンコフの所論を補うならば、想像力を軸とした人間の全体的発達の構図が得られるであろう。

われわれは、このイリエンコフによる想像力の哲学的規定から、ただちに想像の心理学的分析に移ることもできるが、小論のテーマを構成する精神的なものと身体的なものの関係からすると、いましばらくはこの心身の関係、つまり心身問題への哲学的考察を必要とする。もちろん哲学的考察そのものが目的ではなく、心理学の前提となるような考察が目的である。ここでは、ヴィゴツキーの『情動にかんする学説』⁽¹⁾に導かれながら、デカルトの心身二元論とそれに対するスピノザの批判、そこから汲み取るべき視点の解明を課題としたい。

本章でデカルトとスピノザをとりあげるのは、彼らが近代哲学の出発点に位置したばかりではない。小論のエピグラフが示すように、ヴィゴツキーによれば、現代心理学の諸矛盾の源泉はデカルト哲学、とくにその『情念論』(1649年)⁽²⁾において顕現する矛盾にあり、また、スピノザは心理学の全歴史における真の転換点をつくりだしたからである。しかも、この「矛盾」も「転換点」も、それぞれ異なる観点からの心身問題の解明にかかわっている。

デカルトの形而上学あるいは第一哲学が「思惟」と「延長」の二つの実体を想定し、諸現象をそれら二つの実体のいずれかに属させるように分析する二元論に貫かれていることは詳論を要しない事柄であろう。かの「我思う、故に我あり」というものはや疑う余地のない明晰さから想定される非物質的な「思惟」の存在と、この第一原理から演繹される物体的・自然的な「延長」とは、デカルトにとって、他のあらゆる事物がそこから演繹されるべき原理であった。デカルトはその『哲学原理』(1644年)の序文となる「仏訳者へのデカルトの手紙」⁽³⁾において、哲学全体を一本の木にたとえる。この木の根は形而上学であり、幹は自然学、そして木の枝はあらゆる学問であり、それは医学、機械学、道徳の三つの主要な学問にまとめられる。こうした研究計画をデカルトは立て、自然学の内容として、自然学の原理、宇宙論、地球論、そして地球に住む特殊な存在として鉱物、植物、動物、人間を研究しようとする。『哲学原理』そのものは形而上学、および自然学の原理、宇宙論、地球論で終わっており、生物と人間の研究は今後の研究にまつことになった。それは実験を含む長期の計画を要するはずのものであった。

ところがデカルトは、ある意味では研究計画に逆らうかのように、『情念論』を死の直前に仕上げ、そこで彼独自の人間論を展開している。それは7年にも及ぶボヘミアの王女エリザ

ベトとの有名な往復書簡が書かせしめたとしてもいうべきものであった。「(思惟実体にはかならない)人間の精神は、いかにして身体の精気が意志的な運動をするように決定し得るのか」⁽⁴⁾、「精神に物質や延長を認める方が、非物質的なものに物体を動かしたり動かされたりする能力を認めるよりも、私にはより容易であると白状します」⁽⁵⁾というエリザベトに対して、デカルトは「精神と身体との区別とその合一とを、きわめて判明にかつ同時に理解することは、人間精神にはできないと思われる」、なぜなら「心身をただ一つのもので理解すると同時に、二つのものと理解」することは「矛盾するから」であると答えている⁽⁶⁾。デカルトの形而上学においては、思惟と延長は相互に交差することのない2つの実体である。したがって思惟に属する人間精神と延長に属する身体もまた2つの実体として相互に交わらないことになる。エリザベトの問いは、精神とくに意志がなぜ身体を動かしようのかという点にあり、言いかえれば、この場合、精神は身体と交わっているが、それは精神に「延長」の性質があると考えるのが合理的ではないか、という点にあった。

この問題は、情念〔*passion*〕を考察するとき、いっそう明瞭になる。人間は激しい情念を抱くとき、それは何らかの身体反応を伴っていることは明らかであり、情念の考察においては心身問題は回避できないものとなる。デカルトは人間の知覚が人間の外にある物体に対して受動であるときに物体が能動であるのと同じように、情念は精神の受動〔*passion*〕あるいは受動的知覚であるが、「われわれの精神〔*âme*〕が合一〔*joint*〕している身体以上に直接に、われわれの精神に対して能動的にはたらきかける主体があるとは認められない」のであるから「精神において受動であるものは、通常、身体においては能動である」⁽⁷⁾と述べる。まさしく『情念論』において、心身二元論に立つデカルトには難問であった心身合一が展開されなければならないのである。とはいえ、デカルトの分析的方法は、諸現象を、あるものは精神に、他のものは身体に帰属させないではいられない。『情念論』は一方では人間を機械のごとく扱う力学法則の支配する身体論であり、他方では自由意志の絶対性を中核とした精神論であり、その限りでは心身二元論を確保しながら、その結節点として脳内に、したがって脳は身体であるから力学的に運動する「松果腺」を置き、意志がこの腺を傾かせて、刺激を伝達する動物精気の流れを制御するという、心身合一論を繰りひろげるのである。

デカルトは『哲学原理』で意図したように、自然学的研究として人間論を展開するはずであった。事実、『情念論』に序文として掲げられた書簡〔*Lettres-Préface*〕には、『情念論』執筆の意図が「雄弁家」や「道徳哲学者」としてではなく、「もっぱら自然学者として〔*en physicien*〕」情念を説明することにあると述べられている⁽⁸⁾。しかし、「ある主体に関して受動〔*passion*〕であるものは、他のある主体に関してはつねに能動であること」⁽⁹⁾という『情念論』冒頭の定義にすでに矛盾が含まれている。読みすすめれば、この「ある主体」とは精神を、「他のある主体」とは身体を意味することがわかる。精神も身体もともに主体であるという考えは思惟・延長の二元的実体論に照応するが、「身体の能動」はそのまま「精神の受動〔*une pas-*

sion)』したがって「われわれの情念 [nos passions]」であるとは、心身合一を前提としている⁽¹⁰⁾。二元論的立場からの論述においてはデカルトは「自然学者」として情念を生理学的に捉えようとする。だが、「身体の能動」の受動的知覚としての情念は、デカルトの自由意志論からすると、意志による情念の統制を想定せざるをえず、「松果腺」への自由意志の統制をその中核に置く。それは、スピノザが述べたように、「人間が自然の秩序に従うよりもむしろこれを乱し、また人間が自己の行動に対して絶対の能力を有して自分自身以外の何ものからも決定されない」という意味で、自然のなかの人間を「国家の中の国家」のように捉える見解である⁽¹¹⁾。ヴィゴツキーによる次のような批判もまた、デカルトの心身問題での矛盾を深くえぐりだしている。——「情念の問題はデカルトの全体系にとって唯一のつまづきの石であった……。このいまわしい問題がなく、自然のなかに情念をもつ人間が存在しなければ（デカルトにとって動物は自動機械にはかならない）、相互に排除しあう2つの実体——精神的実体と物質的実体にかんする学説は整然と論理的に一貫した発展をとげたであろう。しかし、人間の心の基本的現象である情念は、精神と身体をひとつの存在に結合する二重の人間の本性の直接的な現れである。さらに情念は全宇宙において唯一の、精神と身体が共同生活する現象である。したがって情念は自己の説明のために、唯心論の原理と機械論の原理、神学的原理と自然主義的原理を必要とするのである。デカルトは自分自身の言葉に反して、自然学者としてのみならず神学者としても情念を扱わねばならなかった」⁽¹²⁾。こうして、精神を支配する「唯心論の原理」と身体を支配する「機械論の原理」の奇妙な「合一」、いいかえれば、「機械的原理」の支配する「国家」のなかにある「唯心論の原理」の「国家」のごとき人間論こそ、デカルト情念論の本質をあらわしている。

もっとも、心身の実体的区別を説く『省察』⁽¹³⁾で、デカルトは心身合一を疑う余地なき「真理」とさへ述べている。——「何にもましてしかし私にそうした自然が如実に教えるのは、私が身体をもっていて、この身体は、私が飢えもしくは渇きに襲われるという場合には食物あるいは飲料を必要とする、等々ということ、であって、したがって、このことのうちには或る真理があるということを、私は疑ってはならぬのである」⁽¹⁴⁾。「また自然は、そうした苦痛、飢え、渇き、等々の感覚によって、私が私の身体に、あたかも水夫が舟に乗りあわせているのと同じように、いあわせている、というだけでなく、身体といとも緊密に結合されていて、いわば混合させられており、私はかくて身体と合して一つなるものを形づくっている、ということをも教えている」⁽¹⁵⁾。ヴィゴツキーが述べるように、この点が、つまり精神が身体とひとつとなっていることが、疑う余地なき明晰さから出発するデカルト哲学の出発点となり、アルキメデスの「確固不動の一点」⁽¹⁶⁾となれば、つまり「我思う、故に我あり」ではなく「心身合一」が出发点であれば、いいかえれば、『方法序説』ではなく『情念論』がデカルトの最初の著作であるとすれば、デカルトの人間論は、彼がエリザベトに告白したような矛盾に陥ることはなかったであろう⁽¹⁷⁾。

スピノザの人間論はある意味ではこのようなものである。スピノザはデカルトの概念、たとえば「思惟」「延長」「実体」「属性」「様態」などを借用しながらも、それらにまったく異なる意味内容を込めて独自の人間論を展開しているが、ここでも人間論の基礎には精神と身体の関係が位置づいている。スピノザの場合、実体は唯一、神という名の自然、いわば自然必然性だけであり、思惟や延長はそのような神の属性として位置づけられる。この一元論において精神と身体とは外見的には平行的に存在するように見える。たとえば、『エチカ』第 3 部定理 2 は次のように書かれている。

「身体が精神を思惟するように決定することはできないし、また精神が身体を運動ないし静止に、あるいは他のあること（もしそうしたものがあつたならば）をするように決定することもできない」⁽¹⁸⁾。

確かに、これは心身平行論として読むこともできる。しかし、この定理の備考には透き通るような心身一元論が書かれている。

「精神と身体は同一物であつてそれが時には思惟の属性のもつて、時には延長の属性のもつて考えられるまでなのである。この結果として、物の秩序ないし連結が自然がこの属性のもつて考えられようとかの属性のもつて考えられようとかただ一つだけであり、したがつて我々の身体の能動ならびに受動の秩序は、本性上、精神の能動ならびに受動の秩序と同時にあるということになる」⁽¹⁹⁾。

このかなり抽象的な規定は、デカルトの規定と対比してみると、その意味がある程度は明らかになってくる。デカルトの場合、精神と身体は実体的に区別され、かつ合一することから、身体の能動が精神の受動をもたらす。これが——いわゆるジェームズ＝ラング説と同じような——精神の情念の発生メカニズムであつた。そして自由意志という精神の能動が今度は、身体の受動をもたらす、つまり情念を統制するものであつた。上に引用した第 3 部定理 2 はこのような意味でのデカルト批判と読むことができる。だが、定理 2 備考は、「我々の身体の能動ならびに受動の秩序は、本性上、精神の能動ならびに受動の秩序と同時にである」と述べ、デカルト批判にとどまらず、心身の同一性、したがつて身体の能動は精神の受動ではなく精神の能動として現れることを、つまり心身一元論の積極的意味を明らかにしている。

心身平行論のレベルでたちどまるならば、スピノザを根底まで理解したことにはならない、とヴィゴツキーは述べている⁽²⁰⁾。このヴィゴツキーはその学位論文であつた『芸術心理学』のエピグラフに、他ならぬ定理 2 備考からの抜粋を掲げ、その序文で「私の考えは、エピグラフで提起したスピノザの言葉を旗印にして述べられたのだが、この言葉の後にしたがつて、

驚きに浸ったり笑ったり涙を流したりせずに、理解しようと努めたものであった」⁽²¹⁾とさえ述べている。その抜粋とは上述のものとは別の箇所からのものである。

「…身体が何をなしうるかについて、今日まで、誰もまだ定義しなかった。…だが、建築物や絵画作品、ただ人間芸術だけが創造するその他類似のものの原因がもっぱら身体的原因と見なされる限りにおける自然の諸法則からだけ、その原因を導きだすことはできないであろう、また、人間身体が心によって規定され導かれなければ、どんな寺院も建築できないであろう、と言われるが、私がすでに示したように、彼らは身体が何をなしうるか、その本性の検討だけから何を導きだせるか…を知らないのである」⁽²²⁾

「身体が何をなしうるか」をまだ誰も知らない、というスピノザの言葉は、身体が精神に導かれるだけではないことを、逆にいえば、身体が精神を導く可能性を否定すべきでないことを表している。かりに、ある大画家と駆け出しの画家が頭にまったく同じイメージを抱いたとしても、できあがる絵は大いに違うことはありえるであろう。それは手や指の違いに起因する違いと想定するほかはない。ここでは身体は精神に導かれるだけではない。少なくとも、スピノザの心身一元論から、身体の能動性と精神の能動性との同一性を、また、このような意味での人間発達における身体的モメントの能動性を摂取することができるのは確かである。したがって、そのような身体を視野に入れ得ない人間論や発達論は、心身一元論の見地からすれば、致命的な弱さをはらむと言わなければならない。身体の能動および受動は同時に精神の能動および受動であるというスピノザの心身論こそ、小論のテーマの哲学的基礎となるものである。

IV ヴィゴツキーの発達理論における身体の問題

ここからは心理学的考察に移ることにしよう。論述してきたことを踏まえると、小論のテーマは、幼児の想像発達において身体的モメントをどう位置づけるか、ということになる。ヴィゴツキーの発達論を上述したような心身一元論から捉えなおすと、どういう発達論が描きなおされるかが、ここでの課題である。

あらゆる理論はその歴史性と全面性において捉えられなければならないが、ヴィゴツキー理論をそうした視点から見たときに基本となる問題がいくつかある。

第1に、ヴィゴツキー理論そのものの発展をとらえるという問題である。ヴィゴツキーが実際に心理学研究に従事したのは約10年間にすぎないが、その短い期間に彼自身の理論の発展があり、少なくとも1927年に執筆された手稿『心理学の危機の歴史的意味』⁽²³⁾によってヴィゴツキー理論は飛躍をとげている。さらに筆者の仮説によれば、1931～33年に執筆された手稿『情動にかんする学説』によって次の飛躍がとげられようとしていた。一例をあげるなら

ば、1927年以前に執筆された論文「行動の心理学の問題としての意識」では、ジェームズらの経験論心理学への批判を欠いている。この論文は当時のロシアで主流となっていた反射学的心理学への批判としては鋭いものがあるが、ヴィゴツキーは「ここで展開した考えと、W・ジェームズの行った意識の分析との、結論における一致」⁽²⁴⁾を表明している。ヴィゴツキーの述べる「意識とは反射の反射にはかならない」⁽²⁵⁾とは、ジェームズの言うような、身体反応に対する反応に類似している。また『教育心理学』(1926年)で論述されている情動論もジェームズ—ランゲ説への批判的分析を欠き、後の『情動にかんする学説』におけるようなジェームズらの根底的批判——ジェームズ—ランゲ説のデカルトの本質の解明——には至っていない。これらはヴィゴツキーの理論的自己形成における前史に位置するような著作である。

第2に、1927年以降のヴィゴツキー理論の全体像を意識しながら、彼の個々の命題を捉えることが必要である。筆者の仮説によれば、ヴィゴツキー理論の全体像を捉える場合、少なくとも次の3つの方向性を取り出し、それらを相互に関連づけて捉える必要がある。

①内言論に収斂されていく心理的道具による媒介理論の方向性である。『心理学の危機の歴史的意味』においてヴィゴツキーは、当時の心理学諸理論の方法論的問題を深く分析しながら、ひとつの結論として、マルクス主義心理学の構築に対する視点を提起している。マルクス、エンゲルスらの心理学に関連した諸命題をとりだし、それを体系化しても、マルクス主義心理学は構築されない。弁証法的唯物論という一般科学的法則から社会を分析することはできず、『資本論』つまり史的唯物論が媒介してこそ社会の歴史的分析が成立するのであるが、それと同じように、心理学的唯物論が創造され、それが媒介してこそ弁証法的心理学が構築される。つまり、心理学は「自己の『資本論』」をつくりださねばならないのである⁽²⁶⁾。そうするにはヴィゴツキーはあまりにも短命であったとはいえ、その試みのひとつは、論文「子どもの文化的発達の問題」(1928年)から手稿『子どもの知的発達における道具と記号』(1930年)、手稿『高次心理機能の発達史』(1931年)、著書『思考と言語』(1934年)へと続く心理的道具の媒介理論へと結実した。自然的発達は心理的道具としての言語、典型的には内言によって媒介されて、文化的発達と交差するという発達理論が構築されたのである。

②児童学的研究(今日的に言えば、発達心理学と教育心理学)の方向性である。1928～31年にかけて執筆された児童学の教科書を除けば、発達心理学的研究としては「年齢の問題」(1932～34年)と「乳児期」(同上)から学齢期にわたる心理発達の研究をあげることができる⁽²⁷⁾。各年齢期を「構造」として把握し、その構造における中心的な心理的新形成物と「発達の社会的状況」との矛盾として発達を捉えることや、子どもの発達の質的変化が生じる危機的年齢期を基準に、相対的安定期と危機的年齢期の交替として発達を把握することなどが具体的に即して執筆されている。教育心理学的研究としては『学齢期における想像力と創造』(1930年)、死後に出版された『教授・学習過程における子どもの知的発達』(1935年)をあげることができる。後者には「発達の最近接領域」の理論が『思考と言語』以上に詳細に論述されてい

る⁽²⁸⁾。

③情動理論研究から生じる心身一元論の方向性である。この第3の方向性は十分研究されていないとはいえ、上記の2つの方向性に収まらない著作として、手稿「人間の具体的心理学」(1929年)と未完の手稿『情動にかんする学説』(1931～33年)がある。前者ではヴィゴツキーはフランスの「具体的心理学 [psychologie concrète]」から学びながら、「私の文化的発達の歴史は、具体的心理学の抽象的加工である」⁽²⁹⁾と述べており、ここからは上述の第1の方向性を相対化しようとする意図も読み取れる。さらに後者では、心理学の危機の淵源を、IIIで述べたようなデカルト人間論の矛盾のなかに求め、そこからヴィゴツキーはデカルトの矛盾の克服としてのスピノザの心身一元論に学びながら「人間の心理学 [психология человека]」を構想しようとしたと読み取ることができる。私の仮説によれば、後者の『情動にかんする学説』は内容的に『心理学の危機の歴史的意味』に匹敵し、あるいはその続編であり、それは情動にかんする章をヴィゴツキー理論につけ加えたものというよりは、むしろヴィゴツキーがさらに新しい心理学——「人間の心理学」——の構築のために行った準備作業であったように思われる⁽³⁰⁾。

こうした3つの方向性は、ヴィゴツキー理論を捉えるときに少なくとも必要なものであり、第2の方向性にある心理発達の具体的問題を取りあげるときに、第1の方向性と関連づけるだけではなく、第3の方向性とも関連づけて捉えなければならない。たとえば、ヴィゴツキー理論を「文化－歴史理論」と位置づける考え方は第1の方向性と関連づけているのみで、第3の方向性との関連を欠き、必ずしもヴィゴツキー理論全体の特徴づけとは言えない。ヴィゴツキーの発達理論は自然的発達と文化的発達の交差と複雑な絡み合いと捉えるべきであり、自然的発達の文化的発達への単純な転化を表しているのではない。

ヴィゴツキーは『高次心理機能の発達史』のなかで系統発生と個体発生、したがって人類史と個人史を比較しながら、その両者には「2つの発達路線が存在する」こと、つまり「行動の生物学的発達と歴史的発達、自然的発達と文化的発達」という2つの路線が存在するが、人類史と個人史において2つの発達路線のあり方は「アナログ」であるが「パラレル」ではない、と述べる⁽³¹⁾。つまり、2つの発達路線は系統発生においては順次的にあらわれるが(つまりホモ・サピエンスの登場までの生物学的進化から、道具や言語などの人工物による環境適応としての原始人から文化的人間への歴史的発達へ)、個体発生においては、「2つの過程は融合した形で現れ、……真の統一的過程を形成する」⁽³²⁾のである。言い換えれば、「人間の生物学的発達において支配するのは活動性の身体的 [органическая] 体系であり、歴史的発達において支配するのは活動の道具的体系であり、したがって、系統発生においては2つの体系が離れてあらわれ、それらが個々別々に発達するのに対して、個体発生においては、……2つの体系は同時に一緒に発達する」⁽³³⁾のであり、「子どもの活動性の体系はその当該の状況において、彼の身体的発達の程度と道具の獲得の程度とによって規定」され、「2つの異なる

体系は一緒に発達しながら、本質的には、第3の、独特な種類の新しい発達を形成する」ことになる⁽³⁴⁾。こうして、人間の個人史は「自然」と「文化」の統一として、2つの発達路線の交差と融合の複雑な過程として描かれる。心身の関係から言えば、身体的モメントと分かち難く結びついた自然的発達と精神的モメントとしての文化的発達との統一として、個人史は捉えられることになる。このような意味で、ヴィゴツキーの発達理論は「文化－歴史理論」としてよりは、「自然－文化理論」あるいは「二重発達融合理論」ないし「第3発達理論」と呼ぶほうが相応しい。

言語の獲得を典型とする道具的体系の獲得を抜きに人間の個体的発達は語りえないとしても、発達はそれらの獲得だけではなく、自然的発達がそれらによって媒介された発達でもある。それは人類史におけるような自然的発達から文化的発達への移行ではない。それは、ヴィゴツキーが述べるように、「障害をもつ子どもの心理発達の基本的特徴となるのは、障害をもたぬ子どもには特徴的である融合した2つの発達の側面の分化、不一致、くいちがいである」⁽³⁵⁾という見方からも示唆されるであろう。したがって、子どもの発達において、自然的発達は消滅するのではなく、第3の発達のなかに変形されて保存されており、それ故に発達の身体的モメントもまた同様に変形されて保存されていると考えることができるであろう。

V 幼児期の心理としての身体——シンボルの分析を超えて

こうして、ヴィゴツキーの発達理論によれば、子どもの心理発達は、一方では言語発達との関連によって、他方では精神と一元論的關係にある身体との関連によって、自然的発達と文化的発達が融合していく過程と規定することができる。それは、心理学の具体的問題は《言語と発達》関係とともに《身体と発達》関係によっても分析されねばならないことを意味する。心理発達のひとつでありながら、イリエンコフによれば、その人間論において思考とならぶ普遍的能力であり、ある意味では発達の中心に位置するともいえる想像の発達もまた、自然的発達と文化的発達の融合として、言語および身体との関連において捉えなければならない。

ヴィゴツキーの遊び論⁽³⁶⁾は、そうした二重の分析の重要性を示している。幼児後期における虚構場面をともなう遊びは、第1に、「視覚的世界と意味的世界の分離」の発生をもたらし、したがって、語の意味を事物から解放する。遊びのなかで棒切れが「お馬さん」をあらわすことは容易である。そこでは、棒切れの意味と馬の意味は同時に本来の事物から解放されている。また、この語の意味の解放は子どもの「行為」からの解放とも不可分に結びついている。この遊びのなかで、子どもは棒切れにまたがっているのに、「お馬さん」にまたがっていると言う。語の意味は行為から分離されている。こうして事物や行為から導かれた意味が、いまや事物や行為を先導するようになる。この分析は《言語と発達》の視点からのものであり、遊びに対する、したがって想像に対するシンボルの・意味論的分析である。だが、この分析は

子どもの発達の一側面、つまり知的発達の側面だけをとりあげるものとなり、事実、ヴィゴツキー自身も遊びの主知主義的分析を警戒している。これはピアジェ的水準での分析である⁽³⁷⁾。

ヴィゴツキーは第2に、遊びに現れているものとして「行為における回想」または「行為における想像」を指摘する。ママゴトのような初期のごっこ遊びは日常的出来事の回想に近く、しかも、ことばのみならず行為をとまなう回想であり、身体的モメントをもつ回想である。虚構場面をとまなう、より発達した遊びにおいても、想像はことばだけでは、つまり身体的モメントなしには成立しない。そのような意味において「行為における回想」、「行為における想像」を捉えることができる。それがもたらすものは、他者になって遊ぶことのうちにある回想と想像である⁽³⁸⁾。ここにあるのはもはや子どもの知的側面だけではない。こうした身体的モメントを含んだ分析こそ、感情をはじめとした子どもの発達全体を、つまりイリエンコフとアダム・スミスが述べたような想像力を軸とした論理的思考と人間的感情をその幼児的形態において明らかにすることができる。アダム・スミスは述べている——「想像力 (*imagination*) によって、われわれは彼の境遇に身を置き、われわれ自身が同じあらゆる苦悩に耐えることを思い描き、いわば彼の身体の中に入り込み、ある点では彼と同じ人間になり、そこから、彼の興奮にかんする幾らかの観念を形成し、その度合いは弱いとはいえ、その興奮とまったく同じような何ものかをさえ感じるのである」⁽³⁹⁾。想像力によって他者の「身体の中に入り込み」、そして「ある点では彼と同じ人間」になること、つまり想像力によって他者になることこそ人間的感情の心理的条件であるとされている。その際に、スミスが他者の「身体の中に入り込み」と身体性に言い及んでいることにも注目しておきたい。ヴィゴツキーが遊びを分析して取り出した「行為における想像」は、《身体と心理》の視点から子どもの発達全体に及びうるものであり、それは少なくともシンボリック・意味論的分析よりも豊かな内容と結論を導きうるものであろう。

このように、子どもの心理発達をめぐる具体的な問題は、第1の方向性であった言語による媒介と、第3の方向性であった身体的モメントの介在とによって二重に分析されなければならない。心理発達における身体的モメントは、とくに乳幼児期にあって眼に見える形で姿を現している。生後1年頃に発生する片言に先立って指差しが法則的にあらわれている。その指差しは人間の「最初のことば」とでもいうべきものである。幼児前期には、チンパンジーとも外見的には共通する実践的知能、つまり「手による思考」(パヴロフ) が鮮やかに現れている。さらに幼児後期には遊びの形で「行為における回想」や「行為における想像」が、つまり身体的モメントをとまなう回想や想像が発生する。さらに、ヴィゴツキーが「書きことばの前史」⁽⁴⁰⁾で述べるように、書きことばの獲得という文化的発達の前提には視覚記号の自然的発達があり、それに該当するものは原初的には「身ぶり」であり、そこから発達したものである「描画」と「遊び」である。こうして指や手や身体全体はあたかも心理活動を担っているかのようであり、想像もまた身体によって担われているかのようである。こうして心身一元論は乳

幼児期において、もっとも眼に見える形で確証される。ここでは、エピグラフ(前号の)に示したベラ・バラージュのこばのごとく、精神は直接に身体となって、眼に見えるものとなる。それは「心理としての身体」と呼ぶのに相応しい。そこにおいては、Iで引用したドングリをテーマにした「身ぶり表現」が示すように、身体は直接に子どもの思考や感情や想像を表現し、しかも子ども同士の身体的対話さえ可能にするのである。再び引用しておこう。

男児3人(HG, HI, WS)の太っちょドングリをピックアップしたら、大きい葉っぱを探しにいく動き。

太っちょの3人がそれぞれ、自分のここと思う葉っぱの場所でうずくまると、小さな女兒のドングリ(ID)がその横にうずくまりにいくところがかっこいいな、と思った。

保育者『このドングリ、太っちょの横がいいんだね』

子ども『ひついたら温かいんとちがう?』と、見ている子が言った。

太っちょドングリの横に、小さな女兒のドングリがうずくまりにいく。——これこそ、身体的対話であり、それをじっと見ている他の子どもたちとも対話が成立している。ついでにいえば、こうした身体的対話——考え・感情が身体となり、眼に見えるものになることによって成立する対話——こそ幼児期の想像力の最高の水準をあらわしている⁽⁴¹⁾。

すでに述べたように、ヴィゴツキーの発達理論は自然的発達と文化的発達の2つの路線の交差と融合と特徴づけられる。それは発達の身体的モメントと精神的モメントの交差・融合と重ねて捉えることもできる。幼児期における身体は、たしかにヴィゴツキーの述べるように、幼児期には「文化的で高次の行動の発達における自然的〔природная, натуральная〕側面が優勢である」⁽⁴²⁾が故に、身体はくっきりと想像を含む精神を表している。しかし精神的モメントと融合した身体的モメントはその後、自然的発達と同様、けっして消滅するのではない。思春期に典型的な登校拒否の事例が示すように、「学校へ行かなければ」という精神的モメントに対して、足が動かないなどの身体的モメントがその子どもを護っている。極度の感情的苦悩が精神と融合していた身体を、精神から切り離し、身体に自立的な動きをさせるかのようなものである。本来は精神の能動性と一体である身体の能動性が自律性を獲得し、精神よりも進歩的な働きをする。登校拒否とはそうした事例であり、それは身体的モメントがけっして消滅するのではないことの証左でもある。身体的モメントの能動性のより積極的な事例をあげるならば、身体芸術にかかわる人間は、その想像する精神が想像する身体でもあることを示している。舞踊家、俳優、さらに村主章枝タイプのフィギア・スケーターは身体において想像を表し、その精神は身体とひとつになっている⁽⁴³⁾。こうして、人間の発達を身体的モメント抜きに考えることは不十分であり、心身の統一の視点は幼児に限らず発達の一般理論としても重要なのである。

結論に移ることにしよう。幼児の身体は直接的に心理として現れ、そうした身体は心身一元論のきわめて典型的な証明でもある。彼にあっては想像もまた身体を通して語られ、さらには身体を抜きしては想像は成立しない。想像は言語と関連づけて語られることが多いし、事実、言語発達のある水準を確かに前提とするが、幼児にあっては、想像は身体と関連しなければ発生さえしない。そして身体の能動が同時に精神の能動であるように、身体によってこそ想像は豊かになる。この想像論が連れて行くのは、ピアジェがそうであったようなシンボリック・意味論的分析を超えた地平である。それは、幼児期においては身体こそ、想像を含む子どもの全体としての発達を捉える鍵となる。デカルトとスピノザにおける心身問題やヴィゴツキー理論の見地からなされた「身ぶり表現の哲学的・心理学的分析」が教えるのはこのことである。

〔注〕

- (1) Л. С. Выготский, *Учение об эмоциях. Историко-психологическое исследование (1931-33)*, в кн. Л. С. Выготский Собрание сочинений, т. 6, М., Педагогика, 1984. この手稿の全 20 章中 1~14 章までの邦訳は筆者や土井捷三らによって行われている (ヴィゴツキー学協会『ヴィゴツキー学』第 4 巻および第 5 巻所収)。
- (2) René Descartes, *Les passions de l'âme* (1649), Paris, Flammarion, 1996, デカルト『方法序説・情念論』野田又夫訳, 中公文庫, 1974 年所収。
- (3) 『デカルト著作集』第 3 巻, 白水社, 2001 年, pp. 15~30
- (4) 『デカルト=エリザベト往復書簡』山田弘明訳, 講談社学術文庫, 2001 年, p. 14
- (5) 同上, p. 26
- (6) 同上, p. 31
- (7) René Descartes, *Les passions de l'âme* (1649) article 2, 同上デカルト『方法序説・情念論』p. 96
- (8) Ibid, p. 98.
- (9) Ibid, article 1. 同上, p. 95
- (10) Ibid, article 2. 同上, p. 96
- (11) スピノザ『エチカ』(1677 年) 第 3 部序言, スピノザ『エチカ』上巻, 畠中尚志訳, 岩波文庫, p. 165. なお『エチカ』第 5 部序言では、「松果腺」の機能の想定をめぐって、より直接的にデカルトが批判されている。
- (12) Л. С. Выготский, *Учение об эмоциях. Историко-психологическое исследование (1931-33)*, с. 218.
- (13) デカルト『神の存在, および人間の靈魂の身体からの区別, を論証する, 第一哲学についてのルネ・デカルトの省察』(1641 年), 『デカルト著作集』第 2 巻, 白水社, 2001 年, 所収。
- (14) 「第六省察」。同上, p. 102
- (15) 「第六省察」。同上, p. 103
- (16) 「第二省察」。同上, p. 37
- (17) Л. С. Выготский, *Учение об эмоциях. Историко-психологическое исследование (1931-33)*, с. 220-221.
- (18) スピノザ『エチカ』(1677 年) 第 3 部定理 2, スピノザ『エチカ』上巻, 畠中尚志訳, 岩波文庫, pp. 169-170
- (19) 同上, 第 3 部定理 2 備考。同上, p. 170
- (20) ヴィゴツキーはつぎのように書いている。——「スピノザの観念論的解釈はふつう, 平行論の確認

で満足している。現代の実証主義者のあいだに流行する心身一元論の代表者たちの多くも、同じことをしている。だが、この理解は不十分である。平行論のところで立ちどまることは、スピノザを根底まで理解していないことを意味する。平行論の外見のもとで、スピノザは本質的に唯物論の見解を発展させているのである」(Л. С. Выготский, *Учение об эмоциях. Историко-психологическое исследование* (1931–33), с. 166)

- (21) Л. С. Выготский, *Психология искусства* (1925), М., Педагогика, 1987, с. 10
- (22) 『エチカ』第 3 部定理 2 備考。畠中尚志の訳を参照しつつ、ヴィゴツキーの引用するロシア語から訳した。
- (23) Л. С. Выготский, *Историческое значение психологического кризиса. Методологическое исследование* (1927), в кн. Л. С. Выготский Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика, 1982. ヴィゴツキー『心理学の危機』柴田義松他訳, 明治図書, 1987 年, 所収。
- (24) Л. С. Выготский, *Сознание как проблема психологии поведения* (1925), в кн. Л. С. Выготский Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика, 1982, с. 97. ヴィゴツキー『心理学の危機』柴田義松他訳, 明治図書, 1987 年, 所収, p. 89
- (25) Там же, с. 98. 同上, p. 90
- (26) Л. С. Выготский, *Историческое значение психологического кризиса. Методологическое исследование* (1927), глава 15. ヴィゴツキー『心理学の危機の歴史的意味』第 15 章。
- (27) ヴィゴツキー著作集(ロシア語版)第 4 巻には「年齢の問題」,「乳児期」,「生後 1 年目の危機」,「幼児前期」,「3 歳の危機」「7 歳の危機」が収められている(邦訳はヴィゴツキー『新・児童心理学講義』柴田義松他訳, 2002 年, 新読書社所収。ただし省略がある)。また, Л. С. Выготский, *Лекции по педологии*, Ижевск, Издательский дом «Удмуртский университет», 2001 [ヴィゴツキー『児童学にかんする講義』]には「児童学的年齢の概念」,「子どもの発達の年齢的時期区分の問題」,「年齢の構造とダイナミズム」(以上 3 篇は「年齢の問題」におおよそ該当する),「3 歳と 7 歳の危機」(「3 歳の危機」「7 歳の危機」におおよそ該当する),「移行年齢のネガティヴな相」,「学齢期」,「学童の思考」(この 3 篇は『著作集』に収録されていない)が掲載されている。
- (28) ヴィゴツキー『「発達の最近接領域」の理論』土井捷三・神谷栄司訳, 三学出版, 2003 年を参照されたい。
- (29) Л. С. Выготский, *Конкретная психология человека*, в кн. Л. С. Выготский, *Психология развития человека*, М., Смысл-Эксмо, 2003, с. 1030.
- (30) 心理学史家, ミハイル・ヤロシェフスキーもその著書『レフ・ヴィゴツキー』(Mikhail Yaroshevsky, Lev Vygotsky, M., Progress Publisher, 1989)のなかに「意識構造の統合的シエマ」という章をたてて, そこで『情動にかんする学説』を分析している。
- (31) Л. С. Выготский, *История развития высших психических функций*, в кн. Л. С. Выготский Собрание сочинений, т. 3, М., Педагогика, 1983, с. 30 и 31. ヴィゴツキー『精神発達の理論』柴田義松訳, 明治図書, 1972 年, pp. 44–45
- (32) Там же, с. 31. 同上, p. 45
- (33) Там же, с. 33. 同上, pp. 48–49
- (34) Там же, с. 34. 同上, p. 49
- (35) Там же, с. 39. 同上, p. 56
- (36) Л. С. Выготский, *Игра и ее роль в психическом развитии ребенка* (1933), в кн. Л. С. Выготский, *Психология развития ребенка*, М., Смысл-Эксмо, 2003. ヴ

幼児の想像発達における精神的なものと身体的なもの (II) (神谷栄司)

イゴツキー「子どもの心理発達における遊びとその役割」, ヴィゴツキー他『ごっこ遊びの世界』拙訳, 法政出版, 1989 年所収。

- (37) ピアジェの遊び論やそのシンボリック分析の批判については, エリコニン「子どもの遊びにおける象徴的表現とその機能」, ヴィゴツキー他『ごっこ遊びの世界』拙訳, 法政出版, 1989 年所収, を参考されたい。
- (38) エリコニンは, 遊びのなかで「子どもが大人の役を受け持つということは, 実際には『脱中心化』である」という注目すべき考えを述べている (Д. Б. Эльконин, Избранные психологические труды, М., Педагогика, 1989, с. 480)。しかし, 子どもが遊びのなかで受け持ちうるのは「大人の役」だけではない。受け持ちえないのは「自分そのものの役」を演じることであり, したがって, エリコニンの考えは, より正しくは, 脱中心化をもたらすのは「他者の役」を演じることで, つまり「他者になること」と捉えるべきであろう。
- (39) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Part I Section I Chapter I, 1759
- (40) Л. С. Выготский, *Предыстория письменной речи*, в кн. Л. С. Выготский, Умственное развитие детей в процессе обучения, М. – Л., Государственное учебно-педагогическое издательство, 1935. ヴィゴツキー『「発達」の最近接領域』の理論 土井捷三・神谷栄司訳, 三学出版, 2003 年所収。なお『高次心理機能の発達史』にも, 同テキストは「書きことばの発達の前史」(第 7 章)というタイトルで収録されている。
- (41) 身体的対話の特徴づけについては次の未完の著作に示してある。В. Т. Кудрявцев, Э. Камня, *Экология. Воображение. Образование*. [ウラジーミル・クドリャフヴェフ, 神谷栄司『エコロジー・想像力・教育』]
- (42) Л. С. Выготский, *История развития высших психических функций*, Там же, с. 11. 同上『精神発達の理論』p. 16
- (43) 村主章枝はある意味では「革命的」スケーターである。わが国では長らく伊藤みどりに代表されるようなスポーツ技術的スケートが追求されてきた。ところが村主は身体芸術の探求者である。彼女は滑ろうとする音楽からテーマをつかみだす。ベートーベンのソナタ「月光」を滑るとき, 彼女は「この暗い闇の時代のなかで一筋の光となること」を表現しようとする。モーツァルトのシンフォニー 40 番を滑るとき, 「テロや戦争の時代にあって希望というものを表したい」とテーマを実現しようとする。手や指先の形態的な美を, あるいは感情表現さえ精神による身体の統御によって生みだそうとするスケーターは多いが, 村主にあっては, 彼女が実感したテーマにむけて身体が能動的に動き, 全身の自然な美がつくりだされ, ここにおいて身体は精神とひとつになる。彼女が創造する美は, 心身一元論によってのみ説明されうる美である。

(かみや えいじ 社会福祉学科)

2004 年 4 月 23 日受理